

陸九淵と陳亮 —— 朱熹論敵の思想研究 —— (概要書)

中嶋 諒

本論文は、朱熹(朱子、一一三〇〜一二〇〇)の論敵として著名な陸九淵(一一三九〜一九二)と陳亮(一一四三〜一九五)の思想について考察するものである。

従来の研究では、陸九淵や陳亮は多くの場合、朱熹の思想を前提にその反対者として——また陸九淵に限っていえば、王守仁(陽明、一四七二〜一五二九)の思想を前提にその先駆者として——論じられてきた。そこで本論文では、こういった先行研究に疑義を呈して、陸九淵、陳亮両者の思想を、ひとまず朱熹(朱子学)や王守仁(陽明学)から離れて検討することとした。具体的には、陸九淵や陳亮の著述の中で、朱熹の反対者、王守仁の先駆者と位置づけられては無視せざるをえなかった記述、発言をひろく考察した。そしてまたこのような記述、発言と整合性をつけて、例えば「心即理」や六経注脚論、漢唐王霸の弁など、これまで盛んに論じられてきたことばや理論の再検討をおこなった。

本論文の構成は、次のとおりである。以下、各章各節ごとの概要を述べていく。

第一章 陸九淵

第一節 陸九淵の思想における自立と他者との修養

第二節 陸九淵の思想における講学と読書

第三節 陸九淵の『春秋』解釈 —— その高弟、楊簡との比較を手がかりに ——

第二章 『象山先生文集』の諸本について

第三章 陳亮

第一節 陳亮の政治批判 —— 淳熙五年「上孝宗皇帝書」再読 ——

第二節 陳亮の歴代為政者評価

第三節 陳傅良から見た朱陳論争

第一章 陸九淵

第一節 陸九淵の思想における自立と他者との修養

自立とは、自らを本来あるべき聖なるものと自覚して、その聖なる本来性を十全に發揮していこうとすること。いっぽう修養とは、本来あるべき聖人と、現実としてのあるべからざる自己との差異を埋めていこうとする作業である。

さて陸九淵はときに自立を、ときに講学(他者との集団学習)や読書(他者の記した書、とりわけ経書解釈を読むこと)といった他者との修養の必要を説いている。このことはもとより、

いくらかの先行研究でも指摘されてきたものの、実際には自立か修養のうちのいずれか一方を強調するにとどまるため、これらが陸九淵の思想の中でどのように結びついていたのかを明らかにできずにいた。

そこで第一章第一節では、陸九淵の心のとらえ方に着目した。陸九淵は我々常人の心に、本来善なる側面があると同時に、そうとはいえない側面もまた併存していると考えていた。前者は公なる箇所ともされ、このような箇所があるゆえに、我々常人は例えば父兄を前にする、井戸に落ちんとする赤ん坊を目の当たりにするという状況において、聖人と同様の対応をなすこともできる。いっぽう後者は私なる箇所ともされ、このような箇所があるゆえに、我々常人はつねに聖人のような対応をとり続けることはできない。陸九淵はこの前者の箇所については自立を、後者の箇所については他者との修養を求めていたのである。

なお陸九淵のいう「心即理」とは、心の善なる箇所のみを指して、そこが理として正しいといっているにすぎない。さらに陸九淵は『孟子』告子篇上「先づ其ノ大ナル者ヲ立ツ」の一句を尊重したが、「大ナル者」もまた心の善なる箇所のことであり、ここをまず定立することによって心の善ならざる箇所との間に境界線を引き、いずれのところにも自立を、あるいは他者との修養を用いるべきかを明確にすることを求めていたのだといえる。

第二節 陸九淵の思想における講学と読書

第二節では、上述した第一節での議論をふまえた上で、陸九淵の著述の中から、とりわけ講学や読書についての記述、発言に着目した。

陸九淵は誰しもが過ちを犯してしまうことは避けられないという前提に立った上で、その過ちを自覚し改める必要を説く。ただし人は往々にして、自らの見解を無批判に正しいとしてしまふものだという。そこで講学、すなわち師や友といった身近な他者との集団学習を介して、たえず自らに過ちがないかを確認していかなくてはならないとされる。また読書についても、講学と同様の意義が課せられていた。人は書物、とりわけ経書を読むにあたっては、往々に自分勝手な解釈をして、それを正しいと思い込んでしまうものである。それゆえ他者の経書解釈を紐解き、自らの理解に間違いがないかを確認していかなくてはならない。

とはいえ、もとより講学や読書の場で、他者の見解を無批判に受け入れていけばよいということでは決してない。むしろ陸九淵は、まずは自説を打ち出すこと、自力で経書を読み解くことを強く求めている。もちろん自己の見解のみによっては、自らの過ちを改めることはできないが、いっぽうで他者もまた過ちを犯すことを避けられない以上、他者の見解のみによることは、自説に執着していることと変わりない。まずは自説をたたき台にあげて、それから他者の見解によって批判検討を加えていく、これが陸九淵の求めた講学や読書の方法であった。

なお陸九淵と朱熹との初の直接対決となる、いわゆる鵝湖の会に際して、陸九淵の門弟朱泰卿は、陸九淵（とその兄陸九齡）について「先づ人の本心を發明し、而る後に之をして博覧せしむ」と述べた。ここで「先づ人の本心を發明す」というのは、まずは自説を正誤かまわず打ち出すことであり、いっぽう「而る後に之をして博覧せしむ」というのは、そののちに他者

の見解を広く取り入れ、自説を批判検討していくことだといえる。これは上で述べた陸九淵の講学や読書の方法と軌を一にするものであった。

第三節 陸九淵の『春秋』解釈 ——その高弟、楊簡との比較を手がかりに——

陸九淵はふつう著作に無関心であったといわれるが、「年譜」によれば、実現はしなかったものの、自ら『春秋』注釈書の執筆を企図していたという。第三節では、このことを手がかりに、『象山全集』中に散見する『春秋』にかんする記事、とりわけ卷二三「大学春秋講義」に着目した。

なお陸九淵の早年の門弟とされる楊簡（一一四一～一二二六）は、『易伝』や『詩伝』など経書の注釈書を多く記しており、今は佚して伝わらないが『春秋解』なる書も著したという。ただ楊簡の文集『慈湖遺書』中には「論春秋」と称する文章があり、そこに『春秋』経文に対する断片的な注解を載せる。それによると楊簡は、『論語』子罕篇「意母ク、必母ク、固母ク、我母シ」にもとづく意、必、固、我の四者を断ち切ることを、またこれら四者を断ち切る必要できれば、心は本来の靈妙さを取り戻すことができるという自説を、ことさら取りあげる必要のない箇所でも、しきりに持ち出していることが見受けられる。このような意味で、楊簡の『春秋』解釈は恣意的、さらにはいえばいわゆる心学的なものであったといえる。

それに対して陸九淵は、例えば本心の保持や存養といった自説を、『春秋』解釈に際して持ち出すことはしない。「大学春秋講義」を一読して気づくことは、これが極めて穏当な『春秋』解釈であるということである。また陸九淵は、陸淳『春秋集伝纂例』、およびそこに載せる啖助、趙匡の説を支持していたという。以上のことから、陸九淵の『春秋』解釈は、中唐の新春秋学派の系譜に連なるものでこそあれ、楊簡のようないわゆる心学的なものではなかったということが出来る。

ところで陸九淵が『春秋』注釈の執筆を企図していたとするならば、六経注脚論について再考しなければならぬ。陸九淵は「六経我を註す、我六経を註せんや」と述べたが、これは経書の些末な字義解釈を退けた（我六経を註せんや）までのことであり、例えば経書全体に一貫する文脈をつかむことは否定していない。むしろ経書の文脈をつかむことを強く求めており、その文脈を自らつかんだあとには、それが経書の個々の箇所にはまるか否かを逐一確認していく（六経我を註す）ことが必要であると考えていたのである。

第二章 『象山先生文集』の諸本について

第二章では、陸九淵の文集『象山先生文集』の文献学的な考察を行った。現存最古の『象山先生文集』は、北京大学図書館所蔵の刊本である。これは陸九淵九世の孫裔を名のる陸時寿なる人物の手により、明の景泰年間（一四五〇～一四五六）ごろに刊行されたものと推測できる。またこれと類似のテキストとして、中国国家図書館所蔵の刊本があげられる。こちらは陸

九淵一〇世の孫裔を名のる陸和の手によるもので、成化年間（一四六五〜一四八七）ごろに刊行されたと考えられる。これらは他の多くの陸九淵の文集資料との異同は少なく、また現在陸九淵研究において一般的に用いられている中華書局刊『陸九淵集』とも大差がない。

いっぽう明の正徳年間に、李茂元なる人物により刊行されたとされる中国国家図書館所蔵の別の刊本がある。これは以上であげたテキストと、とりわけ巻一から巻一七までを占める書簡部分の配列において若干の異同がある。例えば陸時寿、陸和刊本の巻二には、いわゆる無極太極論争として名高い朱熹宛の書簡三通を載せるが、李茂元刊本の巻二にはそれらを載せず、かわりに文集中で唯一「心即理」の句が見える李宰宛の書簡を載せている。

なお『象山先生文集』所収の書簡は、おおむね成立年代順に配列されている。ただし巻一・二のみは例外で、陸九淵自身が「本末備われり」などと述べる自信作を、成立時期にとらわれずに収めたのだと思われる。したがって李茂元刊本の編纂者は、朱熹宛の書簡よりも李宰宛の書簡をより重視して、巻二に配列したのだと推測できる。

ところで李茂元刊本は、王守仁（陽明）が序を寄せたことで知られる。王守仁がこの刊本の編纂に携わったか否かは未詳であるが、例えば巻二に朱熹宛の書簡を載せない（王守仁は「朱子晚年定論」を著したように、朱陸の異同をいうことに積極的でない）こと、李宰宛の書簡を載せる（王守仁はたびたび「心即理」と述べ、この句を意識的に用いている）ことは、王守仁の意向と軌を一にするといつてよい。

なおこの李茂元刊本は、のちに四庫全書『象山集』の底本として用いられた。ただし四庫全書本には王守仁の序がなく、また総目提要、書前提要ともに、他のテキストと異同があるという指摘はない。そればかりか李茂元刊本の刊行より今に到るまで、『象山先生文集』の異同、およびそこから暗に窺える王守仁の意向は、これまで全く触れられてこなかったのである。

第三章 陳亮

第一節 陳亮の政治批判 —— 淳熙五年「上孝宗皇帝書」再読 ——

淳熙五年（一一七八）、陳亮は布衣の身でありながら孝宗皇帝に三通の上書（『陳亮集』増訂本、巻一「上孝宗皇帝書」一〜三）を奉獻し、ときの政策に対する激烈な批判を開陳する。第三章第一節では、この三通の上書を通して、陳亮の政治的立場を探ることを試みた。

さて従来これらの上書は、時勢に疎い朱熹やその周辺の道学者らを弁難したものだと言われてきた。しかしこれらの上書の該当箇所を見ると、宋王朝建国以来の儒学に固執し続ける「今世の儒士」「天下の経生学士」を弁難するのみで、これをそのまま朱熹らに対する批判であると限定する明確な根拠はない。またこれらは「今世の才臣」「天下の才臣智士」云々とある箇所と対句の形で表現されており、仮に前者が朱熹らに対する批判であったとしても、陳亮は併せて才臣智士、すなわち儒学の立場を全く無視して、民衆への配慮を欠く実務官僚らにも筆鋒を向けていたといえるのである。

これを要するに、陳亮は「上孝宗皇帝書」において、宋王朝建国当初の儒学に固執し続ける儒者らと、それを無視して民衆への配慮を欠く実務官僚らをいずれも偏向した立場にあると見

なし、儒学をあくまで継承維持しつつ、当世の実情に適応しうるように変更していくことを目指していたことになる。ともすれば陳亮は、儒学を当世の政治状況に適応しうるよう変更していこうとする反儒学者、反道学者と考えられてきたが、そこには併せて宋王朝建国以来の儒学を継承維持していこうとする姿勢を有していたといえるのである。

第二節 陳亮の歴代為政者評価

第二節では、陳亮の歴代為政者評価について、その思想変遷に留意しながら検討した。陳亮は紹興三十一年（一一六一）、一九歳の頃までに「酌古論」（『陳亮集』増訂本、巻五〇八）を著すが、そこでは一時しのぎの謀策に頼らず、着実な計略を立てたか否かが、歴代為政者の評価基準となっていた。

しかし乾道年間（一一六五―一一七三）頃になると、古来の道を継承しているか否かがその評価基準となってくる。秦漢以降の為政者らに対しては、堯舜三代の道をそのまま踏襲するのではなく、その時々に対応しい統治方法を生み出すことを求めていたのではあるが、決して古来の道から完全に逸脱して、智力一辺倒の統治（例えば始皇帝や曹操の統治）をしてしまつてよいとはならなかった。

このように陳亮は、堯舜以来の古来の道が時代に応じて変容されるべきことをいいつつも、決してそれを完全に放棄することは認めず、あくまでそれが継承維持され続けることも求めていた（なおこのような態度は、第三章第一節で触れた宋王朝建国当初の儒学に対する姿勢と軌を一にする）。そしてこの道に対する考え方、および古来の道の継承の如何によって歴代為政者を評価するという方法は、淳熙一一〇―一二二年（一一八四―一一八五）にかけて激化した、いわゆる朱陳論争にも引き継がれていく。

陳亮はしばしば、功利や功績を重視した事功派、功利主義の思想家であるといわれるが、その政治批判にしろ歴代為政者評価にしろ、根底にあるのは宋王朝建国以来の儒学や古来の道が、形を変えながらも時代を通じてあり続けているという大前提である。この大前提があるゆえに、結果として功利や功績が称揚されることはあったとしても、古来の道や宋王朝建国以来の儒学なくしてあげた功績などは、もとより評価に値しないと見なされるのである。

そのご紹熙四年（一一九三）に陳亮は、「勉彊行道大有功」（同巻九）なる文章をあらわす。ここでは道が、喜怒哀楽愛悪といった個人的感情の発露の適切さであると明確に定義されており、この感情の発露の適切さを備えているか否かが歴代為政者らの評価基準となっている。なおこのことは、淳熙一五年（一一八八）に再び孝宗皇帝に奉獻された上書（同巻一、「戊申再上孝宗皇帝書」）からも等しく窺えるものであった。

第三節 陳傅良から見た朱陳論争

第三節では、朱熹と陳亮とのいわゆる朱陳論争が論じられるに際してたびたび引かれる、陳

傅良（一一三七～一二〇三）が陳亮に宛てた書簡（『止齋文集』卷三六、「与陳同父」一）に着目した。

じっさい陳傅良の思想、とりわけその歴史観については、古の具体的な制度政策は時勢に応じて変更されるべきだが、その制度政策をなした聖賢の心意は、今にあっても変わらさず継承されるべきだとするものであった。このような考え方は、第二節でみた陳亮のものと基本的には同様である。

しかし陳傅良は、陳亮に書簡を宛てて「功到り成る処、便ち是れ徳有り、事到り済す処、便ち是れ理有り」と、事業功績をあげた歴代為政者を、すぐさま徳や理を備えたものとして称揚していると非難している。とはいえ第二節でみたとおり、陳亮は歴代為政者らを評価するにあたっては、古来の道を継承しているか否かをその基準としていたのであり、必ずしも陳傅良の批判は的を射ているとはいいがたい。

しかし陳亮自身、朱陳論争に限っていえば、ときに事業や功績をなし尽くしたか否かをもつて三代と漢代唐代との分かれ目とすることがある。これはおそらく秦代以後、漢の高祖や唐の太宗ら優れた為政者がいた一方で、始皇帝や曹操など利欲にまみれた為政者もいたと考えていたことにより、このように批判されるべき不当な為政者がいた時代全体を指して、なし尽くしていないといっているのであろう。とはいえこのような箇所のみによるならば、陳傅良いうような批判が向けられるのもつともなことだともいえる。陳亮が功利や功績を求めた事功派、功利主義の思想家であると位置づけられてきた原因の一つは、朱陳論争における陳亮自身の迂闊な発言にあったということもできるのである。

以上、これらのことから浮かび上がってきたことは、必ずしも朱熹が陸九淵や陳亮の思想を正確に把握した上で、批判を下しているとは限らないということである。本論文で陸九淵と陳亮両者の思想を取りあげたそもその理由は、彼らが朱熹の論敵の代表格であり、しかもあるいは自己の内面を重視する、あるいは現実問題や歴史を重視するという正反対の立場にたつと考えられてきたからである。言い換えれば、陸九淵と陳亮は朱熹をはさんで両端に位置するとされてきたのであり、それゆえはじめは筆者自身も、両者の思想を明らかにすれば、朱熹を中心とする南宋思想史の縁辺を浮き彫りにして、その全体像を素描することができると思っていたのである。

しかし朱熹の陸九淵と陳亮に対する把握の仕方が必ずしもあたっていないのであれば、そもそも朱熹を中心に、その両端に陸九淵と陳亮が位置するという図式自体を見直さなければならぬ。また朱熹が批判の矛先を向けたのは、陸九淵や陳亮にとどまらず、例えば張栻や胡氏一族をはじめとする湖南の学者、薛季宣や葉適ら永嘉学派、さらには仏教、とりわけ禅の信徒など多岐にわたるが、彼らの思想に対する朱熹の把握も、必ずしも正確であるという保証はない。それゆえ南宋時代の思想家の著作を、朱熹の立場からひとまず離れて読み直し、そこから新たな南宋思想史を構築することが必要となるであろう。また以上のような手続きを踏んだ上で、さらに朱熹の立ち位置を再確認する必要も出てくるはずである。

本論文では主として陸九淵と陳亮を、また部分的に楊簡や陳傅良を取り上げたにとどまる。

しかし南宋思想史の再構築の必要性という重大な課題を提示することができたことには大きな意義があると思われる。朱熹を中心としない思想史構築の必要性は、これまで指摘されてこなかったわけではないが、陸九淵と陳亮両者の思想分析という具体的な試みを通じて、上記のような結論を導き出したことに、筆者は本論文の価値を見たい。